

夜

霧に濡れた石畳が黄金色に輝いていた。街灯の灯りがゆらゆらと瞬き、通りに沿って並んだ館をぼんやりと照らし出している。ここはブラジル東海岸の港町、サントスの旧市街。かつてコーヒー市場の活況に沸き、ブラジルのウォール・ストリートと呼ばれた一角だ。世界中から集まったバイヤーが日夜巨額の取引を交わし、政治家から荘園主や銀行家、荷役人や港湾労働者に至るまで、皆が一攫千金を求めて蠢いていた。二〇世紀の初頭には、全世界のコーヒーの半数がサントスから輸出され、コーヒー産業を牛耳る人々が国家をも動かした。一九二三年にはこの地に「パレス」と称するコーヒー取引所が開設される。ルネサンス様式の壮麗な館には、大理石を敷き詰めた取引場や最新の技術を用いた鑑定室がつくられた。海岸沿いにはコーヒー豆を貯蔵する巨大倉庫が林立し、積み荷を運ぶ大型船舶が港を行き交った。また、当時ここは諸外国から押し寄せる移民の玄関口でもあり、一九〇八年に日本最初の移民船「笠戸丸」が到着したことで知られている。

その後、コーヒー取引所はサンパウロへと移転し、「パレス」も一九五七年に閉じられた。全盛期のサントスの輝きは色褪せたもの

の、現在も街はコーヒー輸出の拠点として発展を続けており、取引所跡の周辺にはブローカーやコーヒー商社が群居する。また、コーヒーの繁栄によって築かれた都には今なお独特の芳香が漂い、ブラジルの歴史のゆりかごとして、訪れる人々を魅了し続けている。

そんなサントスのコーヒーの世界で、永年この道一筋に生きてきた人物を訪ねる機会を得た。麗しい香りが漂う一室では、無数のコーヒーカップがテーブルを埋め尽くしている。スプーンを使って液体をすくい吸い込む度に、「ズーッ、ズーッ」と激しい音が鳴り響く。

「大きく音を立てて吸い込むと、霧状になったコーヒーが空気と交じり合う。これが舌全体にくまなく行き渡り、すべての味覚を使って味の判別ができるのです」

そう言って柔和な笑顔を浮かべるのはカップ・テイスターのダビ・テイシェイラ氏だ。カップ・テイスターとはコーヒーの品質を様々な方法で精査する、いわばコーヒーの鑑定士。ダビ氏はブラジル随一のカップ・テイスターとして六〇年以上の経験を持ち、世界的にもその名を知られた人物だ。瞬時に舌と鼻でコーヒーを味わい、微細な情報を読み取りこれを記憶する。同じ動作を一〇〜一二のサン



Romancing with
Coffee
in
Brazil

AGORA
Special